

学習者の能動性を活かした授業共創の試み -神山まるごと高専の実践から-

佐野 淳也

神山まるごと高等専門学校 デザイン・エンジニアリング学科

1. はじめに

23年4月に徳島県神山町に新たに開校した「神山まるごと高専」にて、1年生向けの専門科目である「ネイバーフッド概論」を担当している。

社会共生や地域共創を学ぶことを目的とした科目だが、アンケートによって授業コンテンツや授業形式について学生の希望を聴き、それに沿って柔軟に授業設計を行う「共創型授業づくり」を試みている。その実践とそこから得られた知見について報告する。

2. 神山まるごと高専の教育内容とカリキュラム

神山まるごと高専は、テクノロジーとデザイン、そして起業家精神を一体として学び、「モノをつくる力で、コトを起こす」人材の養成を目指し、2023年4月に徳島県神山町に開校した私立の高等専門学校である。

高等専門学校（高専）は、高校3年間と大学2年間が合わさった5年間の日本独自の高等教育期間であり、高校で学ぶ一般科目と、大学で学ぶ専門科目を5年間で同時に学び、卒業時において一定程度の専門性を持った技術者を輩出する機関として全国に58校存在している。

神山まるごと高専は、日本や世界の未来を切り開く起業家を育成するために、情報工学とデザインの両方を学びつつアントレプレナーシップを身に付けていくカリキュラムに特徴があり、現在一期生43名が学んでいる。

男女比はほぼ半々であり、地元徳島県のみならず20都道府県より学生が集まり、全寮制で共同生活をしながら学んでいる。学費は年間200万円と高額だが、同額の奨学金が5年間に渡り提供されることになっており、その原資となる基金は

様々な企業からの出資や寄付によって賄われていることでも話題となった。初年度入試の競争率は約9倍であり、学びに対し非常に意欲的でユニークな学生が集まっているのが特徴である。

3. ネイバーフッド概論における授業共創の試み

筆者が高専1年生向けに担当する「ネイバーフッド概論」は、5年間のアントレプレナーシップ科目群の初年次導入科目であり、将来起業する上での基礎となる社会共生や地域共創をテーマに学ぶ通年科目である。

具体的には、「隣人」という言葉の定義やその概念を知り、世界の多様性と格差について学び、そうした多様な他者とともに生きていく上での共生の思想や実践について学んでいく内容となっている。

開校初年度の2023年度前期授業が終わった段階で、学生全員を対象にすべての授業内容への学習者からのフィードバックを狙いとした授業評価アンケートが実施された。そのアンケート項目は以下であった。

質問1:この科目で「モノをつくる力で、コトを起こす人」に近づけましたか?

質問2:授業で得られた知識や考え方は、自分にとって新しい発見や気づきに繋がりましたか?また、将来役に立ちそうですか?

質問3:意欲的に学びたいと思える授業でしたか?

質問4:授業の進め方や時間配分・教材などに工夫があり、学生の理解度に配慮した授業でしたか?

質問5:課題の内容や量、回数などは適切でしたか?

質問6:成績評価は自分自身にとって納得感のあ

るものでしたか？

その結果、質問3と5の評価が他の項目に比べて低く、より学生の声を授業内容に反映させながら、より学生たちが主体的に取り組めるコンテンツや授業形式の工夫が必要であると示唆された。

そこで2023年度後期の授業においては、第1回目の授業において学生たちが希望する授業コンテンツ及び授業形式に関するアンケートを行った。

具体的には興味のあるテーマや、各テーマにおいて特に学びたいコンテンツ、また招聘したい授業ゲストや、授業内外で行いたいフィールド学習内容、さらにどのようなアクティブ・ラーニング形式を望むかなどについてそれぞれ複数の選択肢を示しながらアンケート調査を行った。

その結果を踏まえ、授業全体の目的や到達目標自体は変えずに、より学生の希望に沿った授業計画を改めて作成し、2回目以降の授業より実施を行っている。

4. 授業リフレクションに見る主体性の高まり

こうした学生との授業共創の試みの成果については、最終的には後期15回の授業が終わった時点で授業評価アンケートを行い、前期の評価アンケート結果に比べどれだけ有意に各評価項目が向上したかを比較しないと見えてこないが、現時点ですでに学生の授業に対する主体的な参加度については効果が感じられつつある。

そうした学生の反応の変化については、1回目授業の際の以下の学生たちの感想内容（抜粋）からも伺える。

「学生の意見を踏まえた上で後期の新しい授業を作っているのだとわかったことが嬉しかった」

「後期の授業を一緒に作っていく、というのを聞いてとてもワクワクした。今までの小学校中学校では、一緒に作っていくなんていう発想すらなかった」

『学びは自分でつくることができる』ということに気づいた。今まで、一緒に授業をつくるとは言っても、自分たちは内容に関わることはできないも

のなのだと思っていた。ですが、今回初の試みとして「授業内容を一緒に考える」ということをしてくださって、自分の学びたいものを学びたいといえる環境のありがたさを感じた」

「割と多めに不満な点をアンケートで提出したのですが、佐野さんがしっかりと受け止めているようですごく嬉しかった」

「一緒に授業を作っていく形が神山高専らしいなと思った。なぜなら、今まで中学では先生が決めた授業を一方的に受けるだけだったが、今は授業も一緒に考えることができ、同じ目線で対等にいられ、『ここは小さな社会、あなたは大人』という言葉を感じることもできたからだ」

以上の学生たちの感想からは、学びの主体者として、用意された授業への主体的参加のみならず、授業設計そのものに参加できることへの肯定的感情が伺える。

5. 全体まとめと今後の展望

実際には、神山まるごと高専はデザイン・エンジニアリング学科のみで、専門科目も情報工学・デザイン・アントレプレナーシップの3つの組み合わせであることから、学生の興味関心や将来のキャリアイメージも多種多様であり、授業共創アンケートの結果もひとつの傾向に収束することはなく、かなり開きのある結果となった。

それゆえに全員のニーズに沿った授業展開を行うことは難しいのだが、授業設計自体に自分たちの意見や希望が反映できる機会を設けたことが、学習主体者としての学生の能動性を引き出すひとつの契機にはなっていると考えられる。

事実、後期の授業展開においては、前期よりもより学生が授業に協力的であり、また学生との信頼構築も進んだとの所感を持っている。

だがまだ授業は進行中であり、まだ授業担当者の体感レベルに過ぎないことから、1月の授業終了後に改めて学生への授業評価アンケートやインタビュー調査を行い、後期の授業共創の試みがどのように学生の学びの質に変化を与えたかについて、分析と考察を行っていききたい。